

---

# ぴゅあandいのせんと!

C.コード

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ぴゅあ and むのせんと！

### 【著者名】

NZ ハード

### 【あらすじ】

今、とある学校の教室で黒でなき争いが始まっていた！

「あんな、あの子は俺たちに必要な存在なんだよッ！」

「バカ言わないで！ そんなこと、絶対にさせないわ！ あの子は私たちが守つてみせるわッ！」

「ええい、ほかの連中に任せてられるか！ 俺たちが引き受けろー！」

今日も対立が続いている。一人の少女を巡るこの戦いに終わりは訪

れるのだろうか…！？

「全ては、あの無垢で純粹な……少女のために！」

熾烈だがバカらしい、そんな校内戦争が幕を開けた！

第一部修正完了！ 続話も今後執筆していきたいと思います！

## 少女の悩み

今、とある学校の教室で黙ってなき争いが始まっていた！

「あのな、あの子は俺たちに必要な存在なんだよッ！」

「バカ言わないで！ そんなこと、絶対にさせないわ！ あの子は私たちが守つてみせるわッ！」

「ええい、ほかの連中に任せてられるか！ 俺たちが引き受ける！」

今日も対立が続いている。一人の少女を巡るこの戦いに終わりは訪れるのだろうか……？

「全ては、あの無垢で純粹な……少女のために！」

熾烈しれつだがバカらしい、そんな校内戦争が幕を開けた！

パソコンの前の椅子に座り、静かにキーボードで入力する少女がいた。

キーボードで入力している内容は自分が勇気を振り絞って開設した

『ブログ』の記事のものだ。

## タイトル：校内戦争

本文：

『今日も、私が通学している高校では争いが絶えませんでした！  
いつたいどうしてなのッ！？ 平穏な学校生活をエンジョイしていく  
たいのに……。

えっと、こつもの」とはもう置いておきましょーか！

明日は家庭科の授業で調理実習を行います！

品名は お味噌汁みそ、ほうれん草のお浸し、それから親子丢です！

すげく楽しみです！だから、お願ひだから、明日は落ち着いた日  
になりますよー。』

カチッ

Enterキーを押して、マウスを移動させる。『投稿』をクリックして、記事をブログに乗せた。

「ふうう～ッ！」

背筋を伸ばすと、思わず声が出てしまった。

「ふああ、明日も学校……。」

時間割をみると家庭科が2時間続きで組まれている。

「調理実習、楽しみだな。」

咳いた後は明日の準備をして、ベットに入つて眠りについた。そして、少女は願う。

明日一九七〇年、平穏で落ち着いた日でありますよつて

窓から日の光が差し込んでくる。鳥の鳴き声が聞こえてくる落ち着いた朝。

少女にはそれが至福の時で、一日のなかで最も早く訪れる少女のお気に入りの時間帯だつた。

「うへん、朝……。」

目が覚めてからはしばらく窓の外へと視線を向ける。

その後は、自分の部屋から出て、支度を済ませる。少女にとって、朝の支度を済ませてから登校するまでの間は短く思えるものだが、一般人にとつては余裕が有り余るほど。それくらい早く起床したのだ。

なぜなら、少女はこの時間帯を、この至福を堪能したいから。

そして、時は過ぎていった。午前6時45分。

居間で静かに小説を読んでいると、家族が目を覚まし始めた。

「あら、佳奈。今日も早起きなのね。お弁当はもう作ったの？」

「うん。みんなの朝食もできるから。」

「今日は……目玉焼きにしたのね。」

テーブルの上には3人分の目玉焼きと、『ご飯、そして質素だが味噌汁が用意されていた。

「覚めちゃうから、起こして早めに食べちゃってね。」

「わかつたわ。」

『3人』分のテーブルの上にある朝食。この3人のなかに少女は含まれていなかつた。

すでに自分の分は済ませていたので、必要なかつたのだ。

時計の針が7時15分を指すころには学校へ行く支度は整つて、7時40分になつてようやく

自宅から登校した。

家は学校から近距離にあり、徒歩で通学している。普通に歩けば8時に到着する程度の距離だ。

少女の名前は『羽衣 佳奈』はいり かな。高校1年生で、見た目はごく普通の女子高校生である。ややロングで肩より若干下まで伸びている髪は

風が吹くたびに少し靡いて、見た人の視線を釘づけにしていた。

学校内では『かなり大人しく落ち着いた生徒、成績は優秀で運動もできる生徒』

といつ認識で通るよう意識して行動していた。

が、そんな羽衣 佳奈の祈りと努力は僥々散つた。

なぜなら、学校内では壮絶な口論と劇的な動きが絶えなかつたからだ。

その大きな原因は……

午前8時25分。学校内で、教室はすでに登校してきた生徒ばかりでにぎわっている。

その中で今日もお決まりのよう口を走らせる組があった。

「だーかーらーッ！ あの子は俺たちの側に着くんだつて！」

「そんなこと、直接言つてあげればいいじゃない！ 言えないんでしょ？ ねえ、言えないんだよね？」

「もう見てられん！ 俺は言つぞ！ お前たちはおとなしくそこまで見ていろ！」

「待てえええい！ そんなこと、俺が、いや、俺たちが許さん！」

「あんたが言つたところで振り向くはずないでしょ？ 頭冷やして考えなれこよー！」の運動バカ！」

「ふう、また……なのね。」

羽衣はがっくりと肩を落として自分の席……後ろから3番目、窓側とこの位置で口論を聞いていた。

「……！ つたく、もう時間だ。続きはホームルームの後でな。」

「やうね、もう、いい加減認めなさいよね。」

「無駄なことを……。勝つのは俺たちだ。」

口論が終了したらしく、良い感じに落ち着いた雰囲気が訪れた。

「さて、そろそろホームルームを始めるぞ。日直は……『川岸』か。

号令かけてくれ。」

今日もホームルームは口論ののちに始まった。

## キーンゴーンカーンゴーン

「おお、もう時間か。今日の授業はこいまでー 明日は47ページ

の第2段落から始めるから、

第2段落は1回だけでも読んでおくよ！」

今日の現代国語は面白かったなあ。文系はますます好きになれそう。

「起立、令。」

……そろそろ、つるやくなるころかな。  
ガタツ 席を立つて荒々しく佇む姿。

「」の時間で、決着つけるわよ。」

「望むところだ。」

「で、バカの『鏡』京也』は?」

「む、そうだ、奴は……」

鏡 京也こと愛称『カガミン、キヨウヤン』で親しまれている彼は、席でぐつたりしていた。

すると、ゆっくりと席を立つ。

「京也。あんたもこっちきなさいよ。」

「悪い、今日はバス。お前らでやつてくれ……。」

そういうと、教室を出していく。少し気になつたので教室の出口まで行つて見てみると、

彼はトイレへと向かつたようだった。

「どうしたんだろう。」

キヨウヤンはいつも争いを続ける校内ランギング『トラブルメイカー予備軍』の位置づけでは

かなり上位なのに、京に限つて疲れた様子だった。とぼとぼと歩幅も狭かつた気がする。

そんな羽衣の不安は一瞬で理由は判明し、解消された。

1分後……

「は、羽衣さん……！」

「ふえ？」

声の方向をみると、真横から声がした。が、声の主はいなかつた。声は、もっと下のほうからだった。

「羽衣さん……！」

下に視線を移すと、カガミンがいた。床にはいつくばる形で声を掛けられていたので

羽衣 佳奈は異様な光景で反応に戸惑つた。

声はえらくボリュームが小さめで「こそそそそツト」話しかけてきていた。

「え、え、カガミン……！？」

「こ、声は小さめでお願いします！ 今回は、お願いがあつて……。

「わ、わかったから、楽にしていいよ。つらこよね？」

「す、すまない。」

代替予想はついていた。トラブルマイカーといえど、あの口論をしているメンバー。

おそらく、ああ、きっと、この口論の行く先が、ゴール地点が訪れた歌のように思えた。

「お願いします、俺たちの側に、着いてください……！」

！？

え、え、ええええええええ！？

私、いったい何かに巻き込まれようとしている！？

学校は、私に平穏を「えて」ださらないようだった。

## 少女の困惑

「お願いします、俺たちの側に、着いてください……！」

え、え、ええええええええ！？

私、いつたい何かに巻き込まれようとしている！？

学校は、私に平穏を与えてくださらないようだつた。

「あの、で、できれば理由を聞かせてほしいな……。」

「理由……そうだった、そこからまず話さないと。」

ふうっと一息ついて落ち着かせると、カガミンはまた話し始めた。

「俺、いや、俺たちは……羽衣さん。君と、……友達になりたいんだ！」

「…………？」

「と、とにかく、詳しくはこれを見ておいてほしい……！」

そういうと、彼は一枚の紙切れを机の上にポンと置いた。

「や、それじゃ、詳しくはそこに書いてる場所で落ち合つてからで

！」

言いたいことを言いつくしたのか、彼は床に極力体をつかづける形で自分の机まで戻ると、

椅子に座る。そして、そこから急に……先ほどとは全く別人のよう意気揚々と立ち上がり、

口論の中に割つて入るのであつた。

もつとも、トラブルマイカーの代名詞なので、何をしても基本クラスから非難を浴びることはないし、

みんなも笑ってくれるしで行動範囲にも幅が広いので彼にしかできないことも多い。

「ハツハツハ、今日この時も君たちは愉快で楽しそうだな。」

「……どうしたの、京也？ 頭でも打った？」

「むしろ樂しそうなのはお前のようにも見えるが？」

「クツクツク、当たり前だろ！ 何しろ、今日での果てなき口論地獄から脱出できるのかと思えば、

笑いが止まらんよ。ワツハツハツハ！」

「な、ちょっと！ あんた、まさか告発してきたのー？」

「さあ、どうだろうなあ？」

「いいから白状しなさいー！」

「俺が白状している間に、『<sup>すみだ</sup>住田 幸四郎』君が突撃してしまつかもしれないぞ？」

「隙あらば、いつでも準備はできている。」

「グ……覚えてなさいよ。」

「もうすぐ授業の時間だな。せいぜい授業中に策でも練つておくんだな。ま、俺の勝利は目前だかな！」「

口論は、霧囲気から察するにカガミンの圧倒的な優位に立つたことは間違いないだろう。

何しろ、授業中はカガミンが恐ろしいほどの一貫一貫笑顔で授業を受けていたからだ。

ノートもいつも以上にまじめにとつていて、教諭も驚きを隠せない様子であった。

そして、学校生徒から明らかにカガミンの様子が異様なことから今日、9月21日は京也が爆裂二回一回笑顔を炸裂させたことから

『幸福』やら『異様』やら、

『笑顔』やらの象徴といつゝことで『記念日』扱いを校内で受けることとなつた。

「京也の奴、また新しい伝説を作つたとか。」

「ああ、記念日まで作り上げちまつとは末恐ろしい野性児だ……！」

「それと比較して……『折野』や『住田』はなかなか異様な霧囲気だ……。」

「あ、ああ。あれは半端な度胸じや横を通れないぜ。」

カガミン、キヨウヤンこと『鏡 京也』にとつては至福の日。吉野、住田にとつては厄日のように感じられる日であつたが、何があつたのかは生徒間では色々な噂が立つた。最も、事情を知るのは本人のみであるが。

ため息交じりに紙片をとる。文字が丁寧に書かれてあつた。  
『放課後、視聴覚室の正面の階段を下りたところにあるトイレの前で待っています。』

これは、私にとつて何なの？ も、もしかしてラブレター…？  
いや、でも、カガミンに限つてそんな手紙を私に…？

放課後は行ってみるしかなさそう。

調理実習はつつがなく終了した。

この時は比較的平穏であり、少女にとつては思いがけずに訪れた幸福ともいえよう。

そして、放課後は訪れた。

「視聴覚室の正面の海岸を降りたところにあるトイレの前…。  
回りくどい書き方だけど、カガミンのことだから意図があるんだろうなあ。

イタズラじゃなければいいんだけど……。

だけど、必死な表情で頼まれちゃったから断れなかつたんだよね…。  
…。

「…」

トイレの前には、カガミンがいた。

「……羽衣さん。」

「用があるんでしょ？ 遠慮なく言つていいよ。」

「えつと……休み時間に行つたことについてなんだ。」

「……友達になつてほしい。だつけ？」

「あ、ああ。口止めされていたんだが、きつぱり言つ。俺と吉野、  
住田はここ最近、

毎日のように口論してたんだけど、その原因が……君なんだ。」

「え、ええええ！？ わ、私ツ！？」

「ああ、いや、羽衣さんが悪いわけじゃないんだ！ 色々あつて今はこうなつちまつたけど…。」

「そ、その色々って、何があつたの？」

「……あれは、入学してから1ヶ月たつたころだつた。俺が所属している『同好会』があるんだ。

そこに、君を誘おうと思つたんだけど、それが吉野や住田にばれちまつてな……。

バレてから知つたんだが、吉野、住田も羽衣さんを狙つていたみたいなんだ。

だから、俺たちがぶつかつて、今にいたつてるつてわけ。

「……つまり、カガミンたちは私を同好会に入会してほしいの？」

「もちろん！」

真剣なまなざしだつた。

「えつと、カガミン達の同好会つて、何の同好会？」

「俺は……ホントはこんなこと恥ずかしくて言えないけど言ひつよ。実は『コンピュータ』の同好会

のメンバーなんだ。」

「え、嘘！？」

あんなに人気者なのにコンピュータの同好会にも入つてるんだ！

そしたら扱いとかも上手なのかな！？

世の中はきっとこういう人材を必要としてるんじやないかと思つと、すこいなあつて思つちゃつた。

「……吉野は陸上部。住田は野球部のマネージャーとして引き込みたかつたみたいだ。」

「へえ。そうだったんだ……。」

知らなかつた。まさか、知らないといこんなにも壮絶なことが繰り広げられているとは……。

個人的に言つと、運動は……成績ではそこそこ良い評定はもらつているけど疲れるからいやだなあ。

第一印象から出言わせてもらつとカガミンの入会しているコンピュータ同好会のほうがいいかも。

「うーん、そういうのはちょっと家族と相談してから決めてもいい

かな？」

「もちろんです！」

ノロノロと帰宅を繰り返す日々よりは充実するかもしないし、そのほうが高校生らしいかも！

「それじゃ、俺はそろそろ行くね。決断が出たらメールで……あ、メールアドレスが……」

「こ、交換、する？」

「あ、そ、それじゃ、お願ひしようかな……」

「ういふんと、カガミンが固くなつちやつてる気がするけど、気のせいなのかな……？」

「はい、次はカガミンが送つてね。」「

「お、おひ。」

……完了つと。

「私はそろそろ帰るね。それじゃ、また明日。」

「ああ、明日な！」

同好会か。ちょっとワクワクするかも！ 入会は本当にしちゃってもよさそうかな。

カガミンもいるし、楽しそう！

帰宅後、ブログの更新を終えると、母に言つた。

「お母さん。」

「ん、どうしたの？」

「同好会に、入つてもいいかな？」

「そうねえ、高校生なんだし、そういうのもいいかしらね。何に入るか、決めてらっしゃい。

入会した時に、費用のこととかも全部伝えてくれるならそれでいいからね！」

「うん！」

就寝に着ぐ。この日はべつたりと疲れていたらしく、少女は深い眠

りに就いた。

そして、明日の学校は……一段とクラスの雰囲気は騒がしくなつて  
いた。

## 少女の傍聴

騒がしい教室に忍び思いで入室し、静かに席に着く。

到着時間は思ったよりも早かつたためか、クラスに入気はなかつた。室内には彼女を含む4人のみで、席に着いた瞬間から思いもよらぬ沈黙が漂つた。

うう、どうしよう……。

他の人、みんな別のクラスに言っちゃって空気が重いよう……。

それにしても今日に限つて3人がバッタリ対面してるなんて……それも朝早くに。

何か、あつたのかな？ それともただの偶然？

3人に深い関わりあいとかはなかつたはずなんだけどなあ。

あ、カガミンだけは昨日会つたっけ。でも、お話しただけだし……

うーん。

考えていると、不意に会話が耳に入ってきた。

「京也、あんた、やっぱり何かあつたんでしょう？」

……昨日のこと、バレてる……？

カガミン、昨日あれほど余裕そなこと言つちやつてたもんね。ちょっと興味あるし……聞いてるふりしても問題ないよね？

カバンの中からブックカバーに包まれた小説を1冊取りだし、ページをめくる。

『フリ』だけはちゃんとしてバレないようにしなきゃ……！

手に取った小説は厚みは普通、内容の量も割と浅めのものだ。  
羽衣佳奈はすでに読破済みだが……それを知るのは彼女のみだろうと、

確信していた。

適当にページを捲り、3分の1程度のところまで読む演技を始めた。

「何があつただって？」

「そうよ。昨日のいつからか忘れたけど、あの高揚ぶりは並じやなかつたもの。」

「全くだ。早々に吐いとけ。」

うう～、やっぱり感づかれてる～！

「お前らも案外鈍感だな。」

「な、なんですって？」

「どういうことだ！」

余裕の態度で2人から徐々に遠ざかるように歩きながらカガミン言った。

「お前らな、『あれほどの変化』があつてなぜ気がつかない？ そ

うさ、一人の読み通り。

俺はお前たちの……『何かあつたのか?』という質問にはYESと答えておこな。』

「やつぱつ……！ 無断申告は禁止つてルールを忘れたの…?」「ふざけるな！ そのルール以外にも条件は山ほど付いていただろうが。

ルールには『話し合による平等な結論が出なかつた時、自己申告が適用される』つていう、

列記とした条件が定められていたはずだ！ そして、その和解に与えられた期間は1ヶ月ジャストだ！』

「1ヶ月ジャスト……！？ ま、まさか！」

「そう、そのまさかだよ！ 昨日はしつかり条件の1ヶ月を満たしていた！」

「な、な、そ、そんなの」

「無効、か？ おいおい、条件つて、こいつ時のために定めるもんじゃなかつたのか？」

そもそも、条件とか言い出したのは吉野……お前じやなかつたか？』

「グ……。」

「そ、そいえば……。」

「ここので破れば条約破棄。全部、はたん破綻だ。……俺の申告を除いてな。

「吉野、住田が鎮まる。」

「全く、何が『条件』だ。何が『申告』だ。最初からこんなことしなければよかつたんだよ。」

「フ、フフ……勝者になれてさぞいい気分でしょうね。」

皮肉めいた一言が、京也にむけられたが……彼は誠意をこめて言った。

「ああ、俺は勝つたよ。だから言つてやる。最初からこんなもの無意味だつたつてよ。」

「……そんなに、勝つ自信があつたの？」

「違えよ。何もなかつたなら自由に勧誘もできだし、交渉の機会はいくらでもあつたってことだ。

なんでわざわざ敵対してゐる3人で和解せにゃーならんのだ……。終わるわけ、ないにきまつてゐる。

なかつたら、今頃こんな勝ち負けで悔やむことなんてなかつたのによ……。」

「……全部、私の提案が間違つてたつて言いたいの?..」

「ああ、そうだな。これも勝つた側からいわなきゃわからんだろう?あのな、『勝つた』からってなんでもうまくいくとは限らねえ。」

つのことで勝つても、

その先に続かなければ水の泡さ。だから、こんな条件なんて全部忘れちまえ。

お前たちにも、チャンスはあるんだからよ。」

「…………」

……まるで、私には無関係な会話をしていると思つてゐるのかな?なら、今までクラスで激しい口論をしていても合点がいくし、ここで勃発してゐる理由としても通る気がする。

「そりか、そういうことを聞いたかつたのかー。」

住田は、何かを理解したようだ。

「察しが良くて助かる。ま、先手はいただけだし、運が良けりゃ……」

……

その時はお前たちで考えればいい。とにかく、俺はこんな協定はもう辞めるからな。」

そういうと、教室がら出て行つた。

「…………吉野、お前も理解したか?」

「あつたり前でしょ!……食えない奴よね。全く……。」

ブツブツ言つと、吉野は自分の席に着いた。

それみると、住田も席について携帯電話を取り出して操作を始めた。

……なんだか、事情を知ってるからってもたつてもいられない雰囲気になってきてる。

き、聞いても問題は……。

「あ、あの、吉野さん。」

「ん、え、羽衣さん！？ え、えっと……何？」

「さつきの話なんだけど……。」

「き、聞いてたの！？」

「え、う、うん……マズかつたかな？」

「ううん、全然！」

「なら聞きたいんだけど、わっさの口論つて、私……を巡つてやつてるんだよね？」

「ツ！？」

それを聞くなり、ガタッと席を立ち、クラスから出でていく。  
ため息をつく住田。

のちに……

「「オオラアアアアア京也！ バラしたんでしょ！…」

「うお！ なんだよ一体！ ええ！？」

「バラした！ あんた条件破つたわね！ 無効よ！ あんたの申請  
は無効ッ！」

「バツ力野郎！ 僕はもう『抜けた』んだよー 今更見苦しいぞ、  
吉野オオオオ！」

抜けたやつ相手に自分のルールを乞わせるのは『強制』だろ？ そ  
れこそルール違反だぜ。」

「ググ、もういいわ！ なら、私も言つんだからー。」

「好きにじるー ま、お前の度胸でどうにかなる問題だといいけど  
な！」

以降、本格的に閉廷となつたような感じになり、あまりにも平和的  
なホームルームの始まりがあった。

ほつ……。

最後の最後でカガミンは何を言いたかったんだろう？  
3人はみんな理解してるみたいだけど、うーん……今更聞きたらい  
よう……！

ホームルームが終わり今迄から見てみるとさわやかな休み時間。  
うれしい気持が表ってきたのか、佳奈は休み時間はずつと微笑んでいた。

すると、携帯が振動してきた。メールだ。誰からだろう？

『送信主：カガミン

件名：用事

本文：今日も放課後の清掃が終わったら、昨日の場所で話がしたい  
んだ。

もしよければ、メールで返事をください。』

えっと、今日も？

バレなきや、いいんだけど……。

不安の種は再び芽生えて、安心はあつという間に不安に変わったてしまつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6339o/>

ぴゅあandいのせんと!

2010年11月11日22時28分発行